

ダンボール

2022. 5. 9

大きな地震に見舞われる度に、本棚が倒れ、本やファイルが散乱する我が家の書斎には、15年前から大きなダンボールが2つある。荷物が溢れた結果、狭くなってしまった部屋にとっては、邪魔な存在である。何度か、捨ててしまおうと思ったことがある。だが、「いつかは」という思いを拭い去ることができなかった。

その「いつかは」がようやくやってきた。3月中旬の大きな揺れのおかげか、一気に荷物を整理することができた。勢いがついたのか、15年もの間、じっと開けてもらえる日を待ち焦がれていた古びたダンボールが、私にささやいてきた。「もうそろそろですよ」

試しにダンボールを持ち上げ、広いところで恐る恐る開けてみた。実は、もう古すぎてだめになっていることを半分は期待していた。そうなれば捨てるだけである。ところが、中身は予想以上にちゃんとしていた。

とてもとても15年の月日が経過しているとは思えない状態だった。「国語教室通信『窓』平成15年度・16年度・17年度」これがダンボールの中身である。毎年50号分出していたものである。それぞれ50部ずつ印刷されていた。

あの当時、生徒に配布する分に加えて毎回50部ずつ余分に印刷しておいた。後から製本するためである。すぐに製本するつもりが、「そのうち」と思っていたところ、月日は流れ、いつの間にか、大きなダンボールが2つあることが当たり前になってしまっていた。

15年もの間、「そのうち」から「いつかは」と放置できるのだから、人というのはすごい。かと思えば、思い立つと一気に動き出すのだから、これもすごい。つくづく自分という人間に呆れるばかりである。

というわけで、長年の悲願となっていた「国語教室通信『窓』」が製本された。部数は50部である。中学校の国語の先生方にプレゼントしたいのだが、古すぎて役に立たないかもしれない。若い頃、大村はま先生に憧れて、毎年50号ずつ出していた。大村先生の国語教室通信は、今見ても色あせることはない。一方、私のはというと、どうなのだろうか。

大きなダンボールには、「進路通信～夢～」というものも50部入っていた。もちろん製本されていない。こちらは、どう考えても、あまり役に立つとは思えない。そこで、製本は断念した。穴を開けてファイルに綴じることにした。テプラでタイトルぐらいは貼るが、部数も20部にとどめた。寂しい限りである。15年は長すぎた。

もうこれで家人から「あのダンボールはいつ捨てるの」と言われることはなくなった。製本された「国語教室通信『窓』」を1冊、最初に手渡した相手は家人である。